

2020年5月17日（日）久宝教会 復活節第6主日礼拝

メッセージ「神様がいっしょにいます」

牛田 匡 牧師

聖書 ローマの信徒への手紙 8章 31-39節

先月より全国で続いていた緊急事態宣言ですが、新型コロナウイルスの感染の拡大が、一定の基準以下に抑えられているということで、先日より39の県で解除され、大阪府でも休業要請の緩和など、緊急事態措置の段階的緩和が行われるようになりました。その背景には経営が立ち行かなくなってしまう多くの方々からの要望があったのだらうと思われます。この後、再び感染が急増する波の第2波、第3波が来ず、徐々に収束してくれることを願うばかりです。

政府や自治体では様々な支援策が立てられ、実施され始めていますが、「特別定額給付金」にしても、「雇用調整助成金」にしても、実際にはうまく回っていない所が多いようで、本当に今すぐに助けが必要な方々の所には、公的支援の手が届いていないとのこと。休業要請の解除は嬉しいことですが、これで人々の生活が元通りになり、飲食店や多くの職場で、以前のような営業に戻れるのか、実際に始まってみないと分からないことばかりです。そのような先行きの見えない中であって、更に気を重くさせられたのが、「正義中毒」や「自粛警察」と呼ばれるようになった、営業しているお店や外出している人々に対する差別や暴力でした。

またこの感染症の治療の最前線で働かされている医療従事者の方々に対しても、英国のように敬意を表するのではなくて、差別し忌避する人々がいて、現場の方々が心身ともに疲弊して孤立感を深めているという話も耳に入りました。何故、日本ではそのようなことが起こっているのでしょうか。先日、「日本社会の中で、コロナは『病気』として理解され受け取られたと言うよりも、むしろ『穢れ』として受け止められている。だから、みんな自分の所に穢れが来ないように排斥するし、また穢れがあることが外にバレないように、隠そうとする……」という話を聞いて、私はとても納得しました。他の国々に比べて、日本がコロナの検査数も感染者数も少ないことの背景にも、そのような意識があったのかもしれない。

科学的には対処しきれない、手に負えない「穢れ」だから、とにかく避ける。自分たちとは徹底的に区別する……。今、コロナ罹患者や医療従事者に行われている差別と暴力は、かつてのハンセン病患者への差別と同じです。それは日本の風土なのか、文化なのか分かりませんが、負の遺産として、そのような感覚意識が、残念ながら今日まで続いて来て

しまっているのでしょうか。

では、そのような「穢れ」の考えに対して、私たちは何ができるのでしょうか。「穢れ」への対処としてすぐに思い浮かぶのは穢れを洗い清める「禊」という神事です。神仏に祈り、定められた行をおこなうということでも良いかもしれませんが。そもそも、今回のコロナも、人間の驕り高ぶり、神を忘れた不信仰に対する神からの天罰だと主張する人たちもいます。では、神仏の前に頭を垂れて、熱心に祈れば解決することなのでしょうか。「疫病と信仰」というと、奈良の大仏が有名です。

奈良時代の天平年間に作られた大仏は、天然痘の大流行や、旱魃・飢饉、大地震という災害に相次いで見舞われる中で作られました。大仏の建立によって、仏教の力、仏のご加護で人々の心から不安を取り除き、国を安定させたいと聖武天皇が発案したと伝えられています。しかし、実際の大仏作りは、そんなにきれいで簡単なことではありませんでした。東大寺の大仏は（743－755年）11年という長い年月をかけて、延べ260万人という膨大な数の人々が働いて作られたそうです。その人々は、全国から「労役」として集められた人々でした。そして、大仏像に金メッキをするために水銀が用いられたので、多くの人々が水銀蒸気や一酸化炭素の中毒症状を発症しました。多くの人々が劣悪な環境の中で、重労働を強いられ、更に中毒症状を発症していく……。それらは当時、何かの祟りとして理解されていたようです。そのような多くの犠牲の上に作られた大仏でしたが、それに伴った環境破壊や、相次ぐ天災などもあり、大仏建立から30年もしないうちに平城京は、長岡京へと遷っていきました。そのような歴史を振り返る時、ただ単に現代の「コロナ禍」を天罰や「穢れ」として理解し、だから「神仏に立ち返れ」と言うだけでは決して十分ではない、ということをおぼわされます。本当の信心、信仰心とは一体何を信じることなのでしょうか。また神様仏様がいるのだとすれば、その神様仏様は一体どこにいらっしゃるのでしょうか。

今日の聖書の箇所も、「神様はどこにいらっしゃるのか」「キリスト教の中心とは何か」ということについて、私たちに教えてくれています。多くの教会では、「キリスト教の中心は十字架です。御子イエス・キリストが、私たち一人一人の身代わりとなって十字架に架かって下さった。そのことによって私たちは死ぬべき罪から赦されて、解放されて生きることができると、そのように教えて来られたのではないかと思います。また、そのために、元来は処刑の道具であった十字架が、救いのシンボルとして、キリスト教や教会を表わすものとして飾られるようになって来ています。しかし、本当にそうなのでしょうか。

「自分が負うべき重荷を、誰か他の方が代わりに負ってくれた」というのは、確かに有難いことです。しかし、それが自分の「命」だったらどうでしょうか。自分を助けてくれた命の恩人が、代わりに死んでしまったとしたら……。 「有り難い」半面、「申し訳ない」気持ちでいっぱいになってしまうという事も考えられます。しかし、イエス・キリストは十字架上での死、では終わりませんでした。神様はイエス様を死から引き起こされました。今日の聖書の箇所、34 節に明確に記されています。「死んだ方、否、むしろ復活させられた方であるキリスト・イエスが」という部分です。即ち、イエス様は十字架で死んだ方ではなく、自ら甦よみがえったのでもなく、神様によって死から「引き起こされた」「復活させられた」方だ、と受身形でハッキリと書かれています。ですから、十字架は「死」のシンボルではなく、「死からの引き起こし」のシンボルでした。そこに神様の意志、御心がありました。それは何故か。

31 節の始めからですが、「³¹では、これらのことについて何と仰うべきでしょう。神が味方なら、誰が私たちに敵対できますか。」……この「ローマの信徒への手紙」第 8 章は、「私たちを罪に定める、断罪するものはもはやない」ということについて記されている章です。31 節は別の訳では「これ以上、何を言うことがあろうか」とも訳されています。「³²私たちすべてのために、その御子をさえ惜しまず（十字架での）死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものを私たちに賜たまわらないことがあるでしょうか。³³誰が神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです」。

そして、先程の 34 節です。「誰が罪に定めることができましょう。死んだ方、否、むしろ復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右におられ、私たちのために執り成してくださるのです」。この 34 節ですが、ギリシャ語の原文通りに訳すと、「断罪するのは誰か。死んだキリスト、むしろ復活させられたキリストである。そのキリストがまた神の右におられ、また我々のために執り成すこともしてくださる」です。言い換えるならば、裁きを下して断罪する方であるキリスト自身が、私たちを執り成し弁護してくれるのだから、もはや私たちが罪に定められることはあり得ない、ということです。

続いて、35 節ですが、「³⁵誰が、キリストの愛から私たちを引き離すことができましょう。苦難か、行き詰まりか、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か。」「³⁸私は確信しています。死も命も、天使も支配者も、現在のもものも将来のもものも、力あるものも、³⁹高いものも深いものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から私

たちを引き離すことはできないのです」。

ここまで読んで来ると、キリスト教の中心とは、「イエス様が身代わりとなって死んでくれた」ということにあるのではない、ということが分かるのではないのでしょうか。39節の言葉ですが、「私たちの主であるキリスト・イエスが、その身をもって示された、私たちを大切にしてくださいる神から、私たちを引き離すものは何もない」ということ。つまり、平たく言えば、キリスト教の中心とは、「いつでも神様が一緒にいます」「十字架での死をも越えて一緒にいます」という言葉に尽きるのではないかと思います。

この分厚い聖書の中で、一番多く書かれている言葉は、何だかご存知でしょうか。また何だと思われるでしょうか。それは「恐れるな」「怖がることはない」という言葉なのだそうです。例えば、病院を受診することを怖がる小さい子どもに対して母親が、「お母さんも一緒にいるから、怖がらなくても大丈夫だよ」と言うように、たとえ未知のこと、先の分からないことであっても、「神様があなたと一緒にいるから大丈夫。怖がらないで、やってみよう」……。それが聖書に記されている数々の物語であり、また聖書が伝えているメッ^けッセージでした。

「神様がいっしょにいます」……。罪も穢^けれも関係なく、すべての人と共にいます……。だから、私たちは無闇に怖がり過ぎて、他者を攻撃する必要もありませんし、自分一人でやみくもに頑張り過ぎる必要もありません。このコロナ禍の状況下で、皆が疲弊しています。ひたすら「頑張れ頑張れ」と言われても、また「仕事なんだから、家族・肉親なんだから、責任をもって取り組み」と言われても、私たちにも限界はありますし、出来ないこともあります。「みんなしんどいねんな……」まずはその現実を見つめて、無理をするのでもなく、かと言って全てを投げ出すのでもなく、「出来ないことは出来ないけど、それでもやっぱり放っておかれへんな」と言って、出来ることから始めていくこと。希望はそこにあるのではないのでしょうか。心と体が自然と動いて行く時、そこには一緒にいて下さる神様の後押し、力添えがあるのだと思います。

緊急事態措置の解除や、段階的緩和など、私たちの身の回りの社会がこれからどのようになっていくのか、まだまだ分かりません。ですが、それらは決して誰かの罪や穢^けれのせいであつたり、天罰ではないということ。いつでもどこでも、どのような状況にあつても、神様が一緒にいて下さるということ。だからこそ私たちは「今日も命を与えられて生かされている」ということを覚えつつ、私たちは小さい存在ではありますが、今日もそれぞれの場所で神様と共にあつて歩み出して行きます。